

HARLEM

October 2001 10

SPIT'EM OUT! "It's absolutely RAW"

-This paper gives y'all hip hop headz the real words from the real scene...-

CONTENTS OF OCTOBER 2001

SPECIAL INTERVIEW "DJ MASTERKEY" & "DJ YUKIJIRUSHI" page 01	EVENTS SCHEDULE - October to November 2001 page 02	RECOMMENDED EVENTS - Event Information page 03	EVENT REPORT -01 - '01.08.28 Lucky Strike Presents Red Zone Special - '01.09.14 Daddy's House Special page 04	ROCK THE CITY - Can't Deny It Edited by Yas 5 (U.B.G.) SPECIAL TALK SESSION - DJ Cash Money, DJ Rich Medina & DJ Hazime WHAT'S CRACKIN'? - The Edge page 05	DISCS FILE - Selected by HomeBass Records MINAMIDAI TSU-SHIN - Minamidai SONG REVIEW - DJ Masterkey MINI INTERVIEW - DJ Mister Cee page 06	SYOGEYO-MUJO-NO-HIBIKI-ARI - Maki the Magic THE SIGN OF PROOF - Takeshi Hasegawa MO' INFO STAFF STAFF STAFF PRESENT page 07	LOOKIN' FOR DA "REAL SH#%T!!!" page 08
---	---	---	--	---	--	---	--

Special Interview DJ MASTERKEY & DJ YUKIJIRUSHI (for THE LIFE ENTERTAINMENT)

MASTERKEYとそのお人柄で大人気、我がDJ MASTERKEY。待望のアルバムもいよいよドロッ！タイトルはその名も「DADDY'S HOUSE Vol.1」(P6の自信のアルバムレビューも要注目！)今回はTHE LIFE ENTERTAINMENTパートナーのDJ YUKIJIRUSHIと共に「過去」「今」「未来」を語ってくれた。10/12、19、26はDADDY'S HOUSE内でリリース記念のライブも行われますので、イベント/アルバム共々絶対チェックです!!

●まずは、アルバムを作り終えた感想を聞かせて下さい。
MASTERKEY (以下M)：まだこれで終わりではないので、全然安心する事も出来ないし、とりえず一段階目が過ぎて行ったという感じ。一年以上いるとやっていると、なるべく自分の理想に近づけていくという最初のコンセプト通りには、ドンピシャってわけじゃないけどだいぶ近付いたとは思ってますね。

●アルバムのコンセプトを改めて教えてください。
M：希望とか理想としては幅広い人に聴いてもらいたい。若い人から普通にHIP HOPをずっと聴いてる人。プラス、ビギナーからベテランまで。なおかつずっと聴いても飽きないもの、そういうものを作りたいというのがありました。
●今回のアルバムは本当に凄いメンバーが参加していますが、なぜこの人選をしたかを教えてください。
M：やっぱりやるからにはトップの人と一緒にコラボレーションしたいというのもあるし、基本的には「気合いの入っている日本でトップの人達」という人選ですね。まあ「どうして？」って言われると、「じゃあ俺は何でなんだよ」って話になるとイヤだから…ただ、良く知ってる人、良くというかいろいろ前から知ってる人を中心に選びました。

●ちなみに、DJ KAORIの歌での起用というのは、どういった経緯で決まった事なんですか？

M：「矢沢ちゃん、ちょっと私のどうなるのよ？」って言われて(笑)。俺はそういう面白い人がいればどんどん入って来てほしいと思うし、いろいろなエッセンスが入る事によって聴きやすくなるって思っていたし、結果的にオーライだったらO.K.だと思っ、面白いものはどんどんWelcomeって感じだったから。KAORIちゃんもすごい頑張ってるし、同じようにN.Y.で一生懸命やってきた人だから、そういう頑張ってる人を後押しして応援したい。やっぱりYUKIJIRUSHIもそうだし、我々みたいに底辺というかスレスレのところまで生活しながら向こうで音楽聴いてたような人たちの底力というものを自分達は知ってるつもりなので、どんどんそういう奴をフックアップしたいね。

●今回はLIFE ENTERTAINMENTからのリリースという事で、お二人自身で全部の作業をされたという事ですが、その中で一番苦労した事は何ですか？

M：とにかく細かい仕事までやらなきゃいけないって事。電話1本にしてもそうだし、雑誌をブックングするのもそうだし、アーティストに電話して呼んだりとかMIX録りもスケジュール押さえたりとか、当然マスタリングの進行も自分達でやったり…。でもそれは面倒くさい事じゃないと思うし、俺は自分でやりたいって思ったから。自分が知っていたら人にやってもらう時にも指示が出しやすくなるし、レーベルを始めた以上そういう事も頭の中に入れておこうと。「本当はやらなくていいんだよ、そんな事アーティストは！」ってすぐえ言われたけど、それを知っておく事によって損はないワケじゃん。だから大変だったというよりはいろいろ勉強になった。でもDJやりながらアルバム作るってのは本当に大変。本当だったらDJだけやれて有名になってメシが食えたらそれが一番いいよ。FUNK MASTER FLEXみたいに一晚1万ドルとか。俺はそれが理想だったの。でもそうはいかないって事に気が付いて、やっぱり作品として形に残るものを作らなきゃいけないだと思ってたよ。よく、ラッパーやりながらDJやりながら曲作りながらって人いるけど、俺は出来ないね。片手間になっちゃうもん、どれもこれも。でも、この二つだけは出来たって感じだね。

●DJと制作の一番の違いは何ですか？
M：ライブからライブじゃない録音かってところだね。で

もどちらもDJじゃなきゃいけない部分を出さなきゃいけないって思ったよ。アルバムって一枚通して曲を聴いてるとだんだん飽きてきて、曲を飛ばすようになるじゃん。でも絶対に飛ばされるような曲は作りたくないし、どれを聴いてもシングルカット出来るようなものだったらそれが一番いいし。最初の何曲目かまで上がって、ケツの方が下がってくみたいなのが面白くないからもっと手前の方に曲を持ってきたりとか、アッパーな感じで終わらせていくとか、中にはサーッと引けるようなものも入れなければいけないとかいろいろ考えましたよ。

●HARLEMでの4年というDJプレイが今回のアルバムにどういよう反映されましたか？

M：全開バリバリですよ。DJやる時でも曲作る時でもそうだけど、共通している部分は「その人が居て」ってところだと思う。例えばDJやる時も誰かが居るわけだし客が待ってるわけじゃん。楽曲にしてみたら、「俺だったらこういうの聴きたいね、ここでこうなって欲しいね」ってところじゃない？ だからね、お客さんの立場になるっていうのは大事だよ。いつもスカされちゃったら誰も来ないでしょ。アルバムのインタビューを何回かやったけど、よく「聴きやすい」って言われるんだよね。それって「間」だと思っただよね。DJってやっぱり間が大事だと思っただよね。

Y：HARLEMはこの4年ですごい事になったよね、でも制作に関しては始まったばかりだからさ。向こうのDJは、ガンガンDJもやりながらアルバムも出してるけど、実際アルバムなんか自分で作ってないからね。でもそれだけ周りに動ける人間がいて、何をすればいいかわかっている人間がいっぱいいるからこそ出来るわけで、そこを今こっちは模索しているところだから、最初は自分達でやらなきゃいけない事もあるし。それでうまく乗ってくればいろんな事が出来るようになるし。指示するにも自分がやらないといけない部分があるのかも知れないし。

●ズバリ、二人にとってHARLEMとはどんな場所ですか？

Y：もうね、毎週やってるから生活の一部みたいなもんだけど。一週間早いよ(笑)。毎週気が付くと木曜日になってるから(笑)。

M：やっぱり現場でやってる事の大事さというのを凄く感じるワケ。自分の一番の宣伝になる場所だから。例えば俺がクラブDJをやらなくなって、制作ばかりやっててもあんまりよくないと思うんだよね。例えば週末とか地方に行って一生懸命やるとか、HARLEMで一生懸命やるとか、そういう事によって自分自身の「やってる感」みたいなのが出ると思うんだ。そういう意味では欠かせない部分だと思うし、自分自身の大きなプロモーションの場だって感じるよね。楽しいのは当然楽しいよ。

●お二人が95年に日本に帰ってきてもう6年が経ちますよね。この6年でシーンは相当変わってきたと思っんですけど、今の状況をどう感じていますか？

M：俺はこうなる事わかってたね。でも誰にも言わずに黙ってた！

Y：予想はしてまして、それなりに努力もしてきたんだと思うし。でも、マスターがアルバム出すのはちょっと遅いんじゃないの？ もっと早く出ても全然おかしくないと思うよ。

M：いや、俺はちょうど今いい時期だったと思うよ。今が一番成熟されてその中に落とし込んで。まあ、時間掛かったのは確かだよ。

Y：シーンがこうなるって予想はしてまして、これからもっと凄くなるんじゃないかなって思うよ。アメリカの10年遅れだっただけ一部では言われているかも知れないけど、それにしてももっとビジネスが大きくなって



もおかしくないと思う。昔、イカ天とかやってて今はロックがすごく定着したけど、それがたまたま今はHIP HOPだっただけの事だろうし、もっとデカくなっていかないと困ると思う。

M：なるよ。だって今、中学生とか高校生とか聴いてるわけだし、そいつらが大人になればもっとその色が強くなっていくと思うし。俺は、HIP HOPっていうのはカッコイイってわかってたし、そういうカッコイイものをみんなも好きになるだろうっていうのは当然の事だと思うし。HIP HOPの良さって、もっと密着してるし、嘘っぽくないっていうところだと思っただけ。若いやつらがいいもの悪いものがわかるようになってきたって事は、少なくともいい時代になってきたって事だからね。

●HIP HOPというものをあえて言葉にするとしたら？

M：我々もこの音楽をもう十何年も聴いてるから、よく「HIP HOPとは？」っていうふうに分かるんだけど…… 難しいよね。もう生活の一部っていう感じもあるし。みんな価値観が違うんだからさ、「こうだ！こうしろ！」って昔は思ってたけど、今は別に自分の好きなように聴けばいいと思うよ。あんまりこっち側で規制しちゃうと、みんな型にはまった事しかなくなっちゃうからさ。でも、ある程度のベーシックなルールってのはあると思うんだよね。それさえわかってれば何でもしていいと思うの。俺は人生の中でずっと飽きっぽくて三日坊主だったんだけど、この音楽だけはずっと聴いてるんだよね。それが、俺の好きなHIP HOPっていう音楽だと思っ。難しいよね～あんまりガチガチに決めつけるのも、もうそういう時代じゃないのかなと思うし。人によりけりなんじゃない？俺はHIP HOPを聴き出して自分の人生観もすっげえ変わった。何が一番変わったかって言うと、考え方がポジティブになったから。HIP HOPとは？」とか言われるとちょっと難しいんだけど、「HIP HOPによって何が変わった？」って言われれば、ポジティブにもなったし、DJだったら自分の一生の仕事として続けられるようなものとして考えてるし、なおかつ自分が自分達で始める何かだったり、組織だったり、LIFE ENTERTAINMENTもそうだと思うけど。

Y：マスターは、テニス界で言う松岡修造みたいな、そういう熱い人間なわけ(笑)。

M：熱くならざるを得ないものなんじゃないの？それを見たり聴いたり感じたりした時にさ。昔だにぶ感動させられたからね。植え付けられちゃったみたいな感じ。何にも知らない人が初めてこういうのを見て「わあ、こんなにカッコイイもんがあるんだ」って。

理屈じゃ説明できないものってあるじゃん、それって見たり聴いたり感じたりしたものだと思うのよ、五感で。伝えるっていうよりは感じてくれて、体感してくれないとわかんないよ。いくら偉そうな事言っただけ、勉強するものじゃないと思うから。遊んで言っただけ正しいと思うよ、遊びながら勉強する。

●タイトルについては？

M：タイトルは「DADDY'S HOUSE Vol.1」という事になっています。一番最初は「LIFE FOR THE FAMILY」とかいろいろ考えてたんだけど、Mr. FRIDAYとしては…… 自称なんですけど(笑)、分りやすいって感じの方がいいかなって思っ。二人座ってたらDADDY'S HOUSEって感じだし、リックの内容で一番多かったのはDADDY'S HOUSEっていう言葉と、金曜の夜っていう言葉だったから。それならそれを入れないっていう話はないし、このパーティが宣伝できればそれはそれで面白いじゃない。自分の名刺がわりになるわけだから。「何してる人なの？」って言われた時に分りやすい方がいいと思うし。それが実は誰でも聴きやすかったり入りやすかったりするところなんだよね。だからと言ってエキスパートの人が聴けないなんて事は絶対ないと思う。いつも一緒に、イベントのDADDY'S HOUSEもみんなWelcome。CDもWelcome。DADDY'S HOUSEはね、俺は大事にしていますよ。長く続けるとかそんな事どうでもいいんだけど、それだけ面白って事だと思っし、「どうしたらまた来てもらえるのかな？」じゃなくて、俺だったら「なんだよ～、また来ちゃおっかな」っていかに思わせるかってことだから。

●最後に、読者へのメッセージをお願いします。

M：最初に言ったように、どういうものを作ろうかと考えた時、とにかく長く聴けるもの、長く聴けるものと言えば定番、定番というものはいいもの、そういうものを作ろうとしてたわけだし。別に流行りを意識するっていう事ではなく、自分達のオリジナリティをいかに作っていくかというところが議題だったんですけど、我々的にはなんとか理想に近いものができたんじゃないかなと思うんですよ。そこまでは我々の仕事で、そこからはとにかく皆さんに聴いて欲しい。評価っていうのは普通に聴いてもらった人がどう思うかだし、そこが一番大事なことだと思うから。

Y：そうだね、とにかく聴いて欲しい。試聴機にパンパン入ってるんで、聴いてみて判断してもらいたいよね。「あれやバイよ」っていう噂が出るだけじゃなく、本当に内容もヤバければそれでいいと思うしね。